

英訳モーパッサン短篇集「食後叢書」に関する考察

—新出第十二巻本をめぐって—

牧 義 之

(中京大学文学部国文学科4年)

1 明治期の英訳本

明治期のモーパッサン移入に大きく寄与したのは、ロンドンで発行された「The after dinner series」、通称「食後叢書」(以下、モーパッサンの短篇集を指す名称としてこれを用いる)である。このことは、これまでの諸研究でも明らかにされている。そして、よく引用されるのが田山花袋の回想録『東京の三十年』の次の一節である。

ある日、私は丸善の二階に行つた。そしていつものやうに、そこに備へられた大きな目次の書を借りてそれを翻してゐた。ふと、モーパッサンの『短篇集』が十冊か十二冊、安いシリーズで出版されてあるのを発見した。何とも言はれず嬉しかつた。私は金のことなどを考へずにすぐ注文した。

その到着したのは、忘れもしない、三十六年の五月の十日頃であつた。

(中略)

安いシリーズで、汚い本であつたけれど、それが何んなに私を喜ばしたであらう。ことに、この十二冊の『短篇集』の日本での最初の読者であり得るといふことが、堪らなく私を得意がらせた。私は撫でたりさすつたりした。(注1)

田山花袋は短篇集の到着が「(明治)三十六年の五月の十日頃」と述べているが、これは吉田精一氏をはじめとする研究によって三十四年の間違いであること、また、「十冊か十二冊」という部分については、十一冊であるとされている。

本稿では、これまでの「食後叢書」に関する研究を踏まえて、従来の説に再検討を加えるとともに、新出の資料を紹介したい。

2 田山花袋の記述をめぐらる問題

最も一般的に流布しているテキストである岩波文庫版『東京の三十年』の解説において、竹盛天雄氏が「回想録はその性格上、記憶ちがひや誤解、あるいは不注意による誤記などは避けられない」と述べている通り、その誤記・曖昧さがいつも論じられてきた。まず疑われるのが年月日などの数字である。ここでは、前述の2点について、検討してみる。

まず、三十六年と三十四年の相違である。後にも触れるが、「食後叢書」には出版年の記載がどこにも無い(注2)。しかし、島崎藤村が田山花袋に宛てた手紙に次の一節がある。

…モウパッサン短篇集のうちを一二冊拝借致し度、尤もこの御願いは決してとり急ぎたる義には無之…、(注3)

この手紙の日付は明治三十四年十二月三十日である。「モウパッサン短篇集」というのは「食後叢書」のことを指しているので、三十四年以前に花袋は「食後叢書」を入手し、読んでいたことを、藤村は知っていた訳である。また、丸善株式会社発行の「学燈」の広告もこの事実を裏付ける(注4)。

次に「十冊か十二冊」という部分を考えてみたい。これについて、本当は十一巻であることを最初に指摘したのは吉田精一氏(『自然主義文学の研究』)である。しかし、その根拠は具体的には示されておらず、注記として書かれているのみだ。この十一巻という数字は、「食後叢書」の裏表紙に付された広告(注5)と食い違いが、以来、どの研究家も疑問とはせず、「食後叢書」は十一巻までであると結論付けている(注6)。その根拠としては次のようなことが考えられる。

- ①吉田精一氏が指摘したため。
- ②国立国会図書館の蔵書が十一巻までであること(注7)。
- ③「学燈」の広告記載。
- ④花袋の「西花余香」での記述(注8)。
- ⑤第十二巻を見た者が誰もいない。

吉田精一氏が根拠とされたのは恐らく②であると思われるが、矢張り決定的な理由は⑤であろう。従来から「食後叢書」は、田山花袋・島崎藤村とモーパッサンの比較文学研究ではよく話題に出るが、それ自体に関する研究はほとんど無く、等閑に付されてきた感がある。

山川篤氏は著書『花袋・フローベール・モーパッサン』(平成5年5月、駿河台出版社)において、国立国会図書館をはじめ、早稲田大学図書館、中央大学図書館、大阪府立中之島図書館の蔵書を調査し、諸本の形態などを比較している。山川氏も国会図書館の蔵書から、「食後叢書」が全十一巻であると結論付けているが、筆者がさらに全国の大学図書館の所蔵を調査した結果、「食後叢書」の蔵書がさらに確認され(注9)、さらに小さな発見があった。それは、幻の第十二巻本の存在が確認できたことである。

3 新出第十二巻本について

「食後叢書」の第十二巻本は小樽商科大学付属図書館に於いて確認された。同大学所蔵の第九巻と比べてみると、表紙の色や字形が同じなので、同一シリーズであると言っ
ていいだろう。まずその書誌事項を示した上で考察を試みたい。

《表紙》

再製本されてはいるが、原表紙はあり、花模様の中に以下のごとく記されている。

THE AFTER-DINNER SERIES

GUY
DE MAUPASSANT'S
SHORT
STORIES.

TWELFTH SERIES.

LONDON:
MATHIESON & CO., LTD.,
230, STRAND.
LATE BOOKSELLERS' ROW.

《標題紙》

標題紙にも「TWELFTH SERIES.」とある。訳者は十一巻と同じハンニガン (D.F.HANNIGAN) である (注10)。刊記はない。

《目次》

以下に目次の全てを記す。付された数字はページ数を示す。

THE PEDLAR	1
THE AVENGER	11
ALL OVER	18
LETTER FOUND ON A DROWNED MAN	26
MOTHER AND SON	33
THE SPASM	41
A DUEL	48
THE LOVE OF LONG AGO	55
AN UNCOMFORTABLE BED	60
A WARNING NOTE	63
THE HORRIBLE	72
A NEW YEAR'S GIFT	79
BESIDE A DEAD MAN	87
AFTER	92
A QUEER NIGHT IN PARIS	100
THE CONSERVATORY	112
MY TWENTY-FIVE DAYS	119
THE QUESTION OF LATIN	129

THE FIRST SNOWFALL	141
THE FARMER'S WIFE	152
BOITELLE	161
THE TAILOR'S DAUGHTER	172

さて、モーパッサンの「食後叢書」でよく問題にされるのは、贋作（モーパッサンの手による作品ではないもの）の混入についてである。イギリスでのダンスタン版十七巻全集（以下「ダンスタン版」）の研究を皮切りに、日本でもフランス文学者を中心に研究が行われてきた（注11）。そこで、この新出第十二巻本の内容を、春陽堂版『モーパッサン全集』（1965・66年、春陽堂書店）と照らし合わせて、贋作の有無を調べてみた。結果は、収録21作品中、モーパッサンの手によるものでない作品は1つだけであった。「AN UNCOMFORTABLE BED」がそれである。この第十二巻本は極めてモーパッサン純度の高い短篇集であることが分かる（注12）。

次に、この第十二巻本の流通範囲はどの位であったかを考えてみたい。果たして第十二巻本は田山花袋の蔵書に、また当時の文学青年たちの本箱に納まっていたのだろうか。これに関してはよく分からず、花袋は「十冊か十二冊」としか述べていない。国立国会図書館の蔵書が第十一巻までということも、第十二巻本の存在を見えにくくしてしまう理由にはなるだろう。しかし、当時（明治37、8年）翻訳されたモーパッサンの作品に即して考察すれば、第十二巻本が流通していたことを明らかにすることが可能かもしれない。つまり、明治期のモーパッサン翻訳作品の底本に「食後叢書」とダンスタン版のいずれを用いたか考えることである。

例えば、第十二巻本に収められている作品では、明治37年10月30日の読売新聞に正宗白鳥が「夜寒」という題で「AFTER」を、同じく37年12月には「慶応義塾学報」に田中嘯月が「決闘」という題で「A DUEL」を、また、38年5月の「文芸界」には三木天遊が「THE FARMER'S WIFE」を「侍女」という題で訳出している（注13）。この明治37年前後はダンスタン版の刊行から間がなく、輸入されていたかどうか不明だが、底本に第十二巻本が使われた可能性が大いにあるといえる。それを確かめるには、両英訳本の本文と翻訳文の比較考証が必要になってくるが、今後の課題としたい。

4 今後の課題

元来、十一巻までとされていた「食後叢書」の第十二巻本を発見したことで、まず、新たに考えなければならないことは、『東京の三十年』での「十冊か十二冊」という記述だ。花袋が実際に第十二巻本を所持していたか、また、明治期に果たして第十二巻本はどれ位輸入されたのかは明らかでないが、少なくとも、第十二巻本の存在が明らかになった以上、翻訳史も含めて、「食後叢書」に関するより深い検討がなされる必要があろう。現在のところ、第十二巻本は、日本では小樽商科大学付属図書館でしか確認がされていないが、出版・輸入から約100年の時を経て、この新出資料が、多くを我々に語りかけてくれるかどうかは、今後の研究から明らかになろう。

注1 引用は『定本 花袋全集』第15巻（平成6年6月復刻、臨川書店）に拠った。他に正宗白鳥の『自然主義盛衰史』でも「食後叢書」についてふれている部分がある。

赤表紙の粗悪な英訳本によつて、モウパッサンの短篇集は広く読まれてゐた。小使銭稼ぎの翻訳には便利なので、この短編がよく用ひられてゐた。

（『自然主義盛衰史』昭和23年11月、六興出版部、P.69）

注2 山川篤氏は、「食後叢書」の発行は1896（明治29）年であるという結論を出された。（『花袋・フローベール・モーパッサン』P.118）

また、著者が大英図書館のホームページ（<http://catalogue.bl.uk/>）から検索したところ、「食後叢書」の刊行は1896年と記されていた。

注3 十二月三十日 信州小諸より 東京牛込区喜久井町二十・田山録彌（花袋）宛引用は『藤村全集』第17巻（昭和43年11月、筑摩書房）に拠った。

注4 『学燈』明治35年5月号に、「食後叢書」の広告が掲載されている。それによると、「此篇は二三年前より逐次出版し来りたるものに候が、此度第十一冊目を発行して終結致し候。」とある。

注5 裏表紙には「Guy de Maupassant's CEREBRATED SHORT STORIES, Series of 12 Volumes.」とある。しかし、諸本によっては広告がないものもある。

注6 十一巻説をとっている研究者としては、大西忠雄氏、秋山勇造氏、松田穰氏などが挙げられる。しかし、矢野峰人氏は「外国文学の移入 田山花袋の場合」（『比較文学—考察と資料—』昭和31年3月、南雲社）において、はっきりと「十二巻の短篇集」と書いている。『東京の三十年』の記述を信じて書かれたものだろうか。

注7 山川篤氏は、国会図書館所蔵の第十一巻の背表紙に「11th. Series and last.」という記入があると述べている。（『花袋・フローベール・モーパッサン』P.120）

しかし、著者が確認したところ、国会図書館の蔵書は再製本されていて、その際に背表紙に金文字で打たれたものである。紙面等に表記がある訳ではないので、あくまで国会図書館の蔵書の最後という意味で書かれたものである。

注8 「太平洋」（明治34年7月15日号）には「食後叢書」について、「冊を通して十一巻、短篇の数百五十余」とある。

注9 筆者の調査によって所蔵が確認されたのは以下の通りである。

- ・ 京都産業大学図書館（六、七、九、十巻）
- ・ 金沢大学附属図書館凶岸文庫（一卷）
- ・ 大阪大学附属図書館（二、八巻）
- ・ 小樽商科大学附属図書館（九、十二巻）
- ・ 筑波大学附属図書館（二巻）
- ・ 鶴見大学図書館（四、十、十一巻）
- ・ 同志社大学総合情報センター（五巻）
- ・ 富山大学附属図書館川勝文庫（二、三巻）
- ・ 国立民族博物館情報管理施設（八巻）

鶴見大学図書館と国立民族博物館情報管理施設は「状態が悪い」ため、閲覧ができなかった。金沢大学付属図書館凶岸文庫は OPAC 上では第二巻と表示されているが、内容を照合してみたところ、第一巻であることが分かった。第一巻は他には国会図書館の所蔵のみなので、貴重な本であると言えるだろう。

- 注 10 第一巻から第十巻までの翻訳者は、オクスフォード大学修士リチャード・ウィットリングである。これまでの十一巻説では、第十一巻のみ訳者が違うということが不審であったが、第十一巻と第十二巻が同一訳者であったことが判明することによって、出版形態、あるいは輸入時期の差などを突き止める手がかりになるのではないかと思われる。
- 注 11 ダンスタン版は 1903 (明治 36) 年に刊行されたモーパッサン全集である。これに混入した贋作について、モーパッサン研究家の FRANCIS STEEGMULLER は、著書『MAUPASSANT』(1950 年、ロンドン) で補遺 1 という形で考察している。STEEGMULLER は「食後叢書」について、この本の中では一切触れていないが、大西忠雄氏は、「日本比較文学学会会報」第 12 号 (昭和 33 年 1 月) 掲載の「モーパッサン偽作一覧表」において、収録作品の類似性から、「食後叢書」に収録された贋作は、ダンスタン版が元になっていると結論付けた。しかし、これは明らかな間違いである。ダンスタン版よりも「食後叢書」の方が発行が先だからだ。また、大西氏は、春陽堂版『モーパッサン全集』第三巻の解説で、ダンスタン版と「食後叢書」には「贋作が同数ずつ含まれている」としているが、実際に STEEGMULLER が示した贋作のリストと、「食後叢書」の目次を照らし合わせてみても、完全に一致しないものがある。これについては、両本の目次と本文の照合による検討がさらに必要であろう。少なくとも、「食後叢書」第十二巻本の発見により、従来の贋作混入についての見解は大きく変わることが予想される。
- 注 12 筆者が、STEEGMULLER 及び大西忠雄氏が示された、ダンスタン版の贋作のリストと、山川篤氏が『花袋・フローベール・モーパッサン』に示された「食後叢書」十一巻分の目次とを照らし合わせてみたところ、以下のような結果が得られた。

第一巻…収録 13 作品中、贋作なし。
第二巻…収録 13 作品中、贋作なし。
第三巻…収録 10 作品中、贋作なし。
第四巻…収録 19 作品中、贋作は 16。
第五巻…収録 21 作品中、贋作は 19。
第六巻…収録 18 作品中、贋作は 10。
第七巻…収録 22 作品中、贋作は 10。
第八巻…収録 11 作品中、贋作は 7。
第九巻…収録 10 作品中、贋作は 2。
第十巻…収録 15 作品中、贋作なし。

第十一巻…収録 18 作品中、贋作なし。

第十二巻(新出)…収録 21 作品中、贋作は 1。

このデータは、リストと目次とをつき合わせただけの、しかも贋作検討の元にする本が異なるため(ダンスタン版と「食後叢書」)、正確さに欠けるかも知れない。筆者も、一つ一つ作品の中身を検証したわけではなく、さらにダンスタン版も調査不足である。しかし、実際に調査をしても、このデータから大きく外れることはないと思われる。ここで大事なのは、数字の厳密さ以前に、各巻ごとの、およその贋作混入具合である。見て分かる通り、贋作が多く含まれるのは第四巻から第八巻までの、ちょうど「食後叢書」の中間にあたる 5 冊である。その前後は純粹な、混じりっけなしのモーパッサン短篇集となっている。各巻の贋作混入率の差は、「食後叢書」の出版形態がその要因ではないかと考えられる。筆者は、今後さらにダンスタン版や、海外の研究の調査・考察を含めて、「食後叢書」の実態を解明したいと思う。

注 13 『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》32 モーパッサン集Ⅱ』(1999 年 12 月、大空社) 所収の「明治翻訳文学年表 モーパッサン編」参照。